

=北里大学北里研究所メディカルセンター病院 広報誌= 百合樹 (ゆりのき)

＝第2号＝

KMC病院、現在とこれから



ゆりのきの花

群馬大学社会情報学部：青木繁伸氏撮影

平成20年4月1日に北里研究所と北里学園が統合し、学校法人北里研究所が新たに発足しました。当院は北里大学北里研究所メディカルセンター病院と病院名に北里大学が加わり、大学病院になりました。しかし、病院の診療内容が大きく変わるわけではありません。地域医療支援病院として住民の皆様方の健康にお役に立つ病院であることは堅持します。救急診療、病診連携の充実を最重要課題として取り組む病院、小児・産科医療を充実させて地域で頼りになる医療機関を目指します。昨年6月日本医療機能評価機構からの認定を取得し、当院の病院機能が一定の水準にあることが客観的に評価されました。今年4月からは入院診療を包括医療で行う（DPCと呼びます）病院になり、急性期疾患に重点をおくこととなります。これからはプライマリー・ケアと高度先進医療の調和がとれた病院を目指したいと思えます。

地域社会のニーズに合う病院として、がん、脳神経疾患、循環器疾患、糖尿病の診療に重点を置きたいと思えます。それにはそれぞれの分野で専門医や専門看護師を育てることが必要です。大学病院の使命の一つに医師、看護師、薬剤師などの教育があります。地域住民の要望に合う質の高い人材を育成することが当院の使命に加わりました。

安全な医療を提供することは病院の最も重要な課題です。医療にリスクが伴うことは事実です。リスクを減らすこと、無くすことに病院全体で一生懸命取り組むことが医療安全の基本とされています。私達は全職員で安全な医療に取り組んでいます。近年、医療崩壊が声高に叫ばれています。当院も医師不足のため皆様にご迷惑をかけているのが現状です。大学病院になったのですから医師不足はこれから解消に向かうと期待しています。開院以来、絵のある病院として親しまれてきました。院内には鈴木信太郎（文化功労者）をは



いしとかばさくら
病院近くの天然記念物石戸蒲櫻

じめ内外の有名画家の絵が多数飾られており、美術館のようです。豊かな自然環境とともに来院の皆様方に癒しをもたらし、治癒を促すと信じております。

近藤啓文（北里大学北里研究所メディカルセンター病院病院長）

KMC病院開院時の思い出



生物製剤研究所(ワクチンの研究・製造を担当)

晩秋の日、来客を北本キャンパス内に案内していて、ふと当地の事業経過を思い出した。

1982年、将来の(社)北里研究所の発展のため病院建設を吉岡勇雄所長(当時)に提案した。私の主宰する研究グループのロイヤルティーを原資とするものであった。その提案に

基づき、各委員会が編成され、大蔵省からの土地(現 北本キャンパス)取得、医師会の了承、目黒区にあった土地の売却等々を進めた。時として極めて困難なこともあったが、その一つ一つを社員、職員が一丸となって乗り越え、1989年3月29日に開院に漕ぎ着けた。当時の調査で、北本市、桶川市、鴻巣市には市立病院がなく、また埼玉県全体でも人口に対するベッド数が全国的に最も少なかった。そこで、地域の中核病院を目指すことにした。国はこの広大な土地を一時期、3分割することも考えていたが、我々の度重なる陳情で一括払い下げをしてもらうことができた。開発前のこの地に立ち、『この地が手狭になるくらい事業展開できた時、北里研究所の発展は盤石になる。早くそうなって欲しい』と思ったことが懐かしく思い出される。現在、その思いの近くまで発展したと思う。

事業開始当時、21世紀は《心の時代》になると考えた。ここで働く人々は技術、知識のみならず心を大事にする人々であってほしいと願い、絵画の展示、音楽会の開催などを行えるハード面での工夫をした。我が国の本格的なヒーリングアートの先駆けである。音楽会は有志のアーティストの支援で回を重ねることができ、絵画は人間讃歌大賞展の公募で優れた作品を納めてもらい、著名な有志の寄贈もあり、極めて質の高い作品を数多く収蔵・展示することができたのは幸いであった。

現在は圏央道も延び、JR 埼京線開通など東京からのアクセスもよくなり、白金本部との連携も密になることが期待される。最近の厳しい医療環境を乗り越え、誌名「百合樹」のように、社会的使命を果たしながら未永く発展することを願って、稿を終わる。

大村 智(学校法人北里研究所 名誉理事長)

[NST]ってなんだろう!?



病院に入院されたご経験はありますか？もちろん今まで、どこの病院にも入院された経験がない、という方もいらっしゃると思います。でも、もし入院しなければならなかったら、どんなことが不安になると思いますか。「入院期間は？」「治療の効果は？」「医師の説明が理解できるか？」

などという不安もあるでしょう。実際は「好き嫌いが多いため病院の食事が食べられるか？」とか「体力が必要な手術前なのに、食事は止められているけれど大丈夫？」など、食事や栄養に関する不安も多く経験します。入院となると、ついつい「薬」「手術」「検査」などに目を奪われがちですが、食事すなわち栄養という点も忘れてはならない重要なことです。

話は変わりますが、皆さんは「養生」という言葉をご存知でしょうか。「医者の不養生」などといいますが、「養生」とは「健康のために行っている日頃の摂生」や「病気の回復を図ること」などを意味する言葉です。江戸時代の「養生所」、今でいう病院では食うや食わずの病人に「精がつく（栄養のある）食べ物を食させる」ことが最高の治療のひとつでした。つまり「栄養を補給する」「栄養状態をよくする」ことは病気の治療の基本の「き」なのです。当然のことですが、生きていくための活動源として、また身体を作る原料を食事として補給できなければ、がりがりにやせての栄養失調になってしまいます。こういう状態で病気にかかったりけがをしたら、きっと「大変だ、治るかな」と心配することでしょう。もしも、患者さんが食事を摂ることができない、もしくは摂ってはいけない状態であれば、何とかして栄養を補給するために一生懸命知恵をしぼって工夫する必要があります。



栄養サポートチーム「NST」の活躍

表題の「NST」とは、日本語で「栄養サポートチーム」と呼ばれる「医療チーム」のことです。当院では医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師や理学療法士、言語聴覚士などの専門職が、それぞれの専門性を生かして「入院中の栄養状態をサポートする」ためにNST活動をおこなっています。

具体的にはまず入院時に自宅で食事が摂れていたか、最近体重は落ちていないかなどをうかがい、体調や検査結果などとあわせて栄養状態を確認します。そして入院中は食事の摂取量に注意し、手術や治療による体力の消耗を考慮しながら治療が効果的に行われている



か、栄養状態を観察します。もし栄養状態に問題がある、もしくは問題が起きそうであれば食事内容の変更や食事以外の栄養補給法（点滴内容や投与ルート）など細かい点まで検討して、主治医とともに一番適切な栄養療法を考えます。栄養状態がよくなると病气やけがの治りがはやくなったり、寝たきりの状態での「褥瘡（床ずれ）」を予防したり、感染症にかかりにくくなったりします。

「NST」による面接風景

言い忘れましたが、皆さん自身も自分のための「NST」のメンバーです。もし入院することがあったら、より効果的な治療のためにどのような栄養療法が一番いいか、その為には自分は何をしたらいいのか是非一緒に考えていきましょう。

畑五月（管理栄養士・NST 専門療法士）

次号からコラム「にゅ〜とりしょん（栄養）」にてNSTからの情報を順次掲載いたします



「NST」による^{えんげ}嚥下訓練風景

編集後記

第2号を無事お届けすることができました。桜咲く4月当院に希望に胸を膨らませた新入職員が入職します。4月からは糖尿病外来も充実して、近隣の診療所で糖尿病コントロールが不良な患者さんとの病診連携を通じて、病態管理をより充実することが出来ます。また、定期的に、当院の会議室でBLS講習会（Basic Life Support；意識を失った傷病者が発生した場合に一般市民が実践可能な器具や薬剤を用いないで行う一次救命処置）を開催し、救命処置のレベルアップを啓発し、認定基準合格者には資格認定証が授与されています。近隣の方々にもBLS講習会が受けやすいように整備をしていきます。



発行者：北里大学北里研究所メディカルセンター病院
広報委員会

発行責任者：笹岡 大史

発行所：埼玉県北本市荒井6-100

電話（048）593-1212（代）

発行日：平成21年4月1日

BLS（Basic Life Support）講習会